

# 「子ども学」の変遷と課題

新田 司

The Changes and Problems in ‘Kodomogaku (Child Science)’

Tsukasa NITTA

近年、新しい学問領域として注目されている「子ども学」について、おもに佐野美津男、小林登の説を中心に概観した。一方で、ここ数年の学部、学科の名称に「子ども」や「こども」を冠する大学・短期大学の動向を示して、新しい「子ども」をめぐる動きを検討し、本学における「総合子ども学」について、現状と今後の課題について考察している。

## 1. はじめに

1980年代以降、日本社会は急速に変化した。そして、その後30年あまり経過した今日においても、そうした変化は継続している。事実、80年代に登場した情報化、少子高齢化、国際化、産業構造の変化などのキーワードは今日も頻繁に使われており、現在でもそれらをめぐる問題はタイムリーなテーマであり続けている。こうした問題は学校教育のあり方にも大きな影響を及ぼした。1980年代にはいると、先のキーワードにみられるような社会変化に対応した教育改革の必要性が叫ばれる。1984年に設置された「臨時教育審議会」は今日に続く教育改革の扉を開き、その後、文部省（現文部科学省）は学習指導要領の改訂を通して改革を進めていくこととなる。

文部省は1989年改訂の学習指導要領総則で、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実」をはかる教育をめざし、自己教育力の育成、基礎・基本の重視、個性重視の原則を掲げた。そのため「関心・意欲・態度」の育成をめざすいわゆる「新しい学力観」にもとづく教育を推進した。1996年の中央教育審議会答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』では、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など」の豊かな人間性、「たくましく生きるための健康や体力」といった資質や能力を「変化の激しいこれからの社会を〔生きる力〕」と称して、育むことの重要性をとき、1998、99年の改訂では、「生きる力」を育む教育を教育のねらいとした。

しかし、こうした改革にもかかわらず、90年代以降、子どもをめぐる問題はむしろ深刻化し、それまでに経験したことのない子どもの問題に直面する。80年代には少年非行やいじめなどの中高生を中心とする“少年の荒れ”が社会問題化した。90年代以降は、神戸での小学生殺害事件を代表とするそれまでにない少年の凶悪犯罪の続発などにより“子どもが見えない”という表現が登場した。ここ数年、小学校では学級崩壊が広がり、子どもの荒れが低年齢化し、また“宇宙人”とよばれるベテラン教員でさえ対応の難しい子どもも現場では大きな問題となっている。“子どもが変わった”という表現に象徴される、これまでとは質の違う子どもたちの登場は大人を戸惑わせている。

では、本当に“子どもが変わった”のだろうか。私たちは変化する子どもに目を奪われがちで、あたかも子どものみが変わっていったように感じる。しかし、それは子どもを取り巻く社会環境の変化に応じて、子どもも変化したとみるのが妥当であろう。そうすると、子どもをめぐる問題を考察する上で「子どもはかくあるべし」からの議論では解決は困難であろう。そこで、なぜ“子どもが変わった”のか、子どもをありのままにみつめ、子どもが変化する背景を探ることが求められていると考える。

近年、新しい学問領域として「子ども学」が注目されている。「子ども学」は、子どもの問題を扱うのは教育や保育に関する学問、というこれまでの既成の観念を超え、学際的なアプローチによって多面的に子どもにせまり、研究を行うことで、新しい子ども観の形成をめざすものである。こうした視点は、今日の子どもの問題を解決するための突破口となりうると思われる。一方、教員養成、保育者養成を行っている大学・短期大学の学部、学科のなかで、その名称に「子ども」や「こども」を使用する動きが目立ち、特にここ数年は顕著である。こうした動きも新しい子どもの見方を必要としているという意識を反映したものと思われる。そこで本稿では、これまでの「子ども学」をめぐる状況を概観し、次に大学・短期大学での学部・学科名に「子ども」や「こども」を使用する動きを紹介し、最後にこれからの「子ども学」について考察し、本学が標榜する「総合子ども学」の今後を検討していきたい。

## 2. 「子ども学」の変遷

今日、「子ども学」の用語は一般に広く認知されているとはいえないが、2003年、「日本子ども学会」が設立され、学問領域として確立されつつある。このように、学問領域としての「子ども学」、あるいは「子ども」の存在そのものを学問対象の中心とした研究は決して古くない。そこで、この節では「子ども学」という言葉が登場した背景、さらに「子ども学」とは何かについて概観していきたい。

「子ども学」を初めて提唱したのが、児童文学研究者の佐野美津男である。彼が初めて使

用したのが1970年のことである<sup>1</sup>。先述の通り、子ども学が世に登場し始めるのが1990年代であるので、佐野が提唱した時点では子ども学はほとんど知られていなかった。しかし、佐野は当時でも「内容としては子ども学にまぎれもない科目がある<sup>2</sup>」と述べ、「子ども学」を学問として確立する必要性を感じとっていた。佐野の「まぎれもない科目」とは何か。それは「児童学」であり、「児童」を冠した講義であった。佐野の提唱した1970年代はおろか80年代ですら文部省は、講義内容においては今日の子ども学や子どもを冠した講義に匹敵するものであっても、「児童」に代わって「子ども」を講義名とすることを認可しなかった<sup>3</sup>。こうしたなかで佐野が児童学ではなく、子ども学を提唱したのには次のような理由がある。少々長いが引用すると、「児童心理学や児童文学のように、子どもを対象としながらも専門系統としてそれぞれに心理学と文学とに区分されるべき必然性を持っているものならばやむをえないが、そうした各専門系列を総合させることによって、子どもという対象を適確にとらえるはずのものまでが単独に細分化されたままにおかれているというのはどうにも納得できかねる」とし、さらに「いっばんの学問の分野では、学際ということばもあって、互いに関連しあう分野の交流、総合化、重層化がさまざまに試みられ、人間学とか地球学とか呼ばれるようなものまでが生まれているのに、子どもに関連する学問は、むしろ逆に細分化の方向にすすんでいるのではないかとさえ思われる<sup>4</sup>」と述べている。今日の子ども学が学際的なあり方を志向していることを考えると、佐野の主張はそうしたスタンスを先取りしたものであるといえる。そして佐野は子ども学を、「子どもという名の人間存在をひとつのまとまった対象界とする学問として」構想し、「子どもに関連する諸学は、きびしく子どもそのものに即して当否を検証されながら総合化されていくべき」ものであると述べている<sup>5</sup>。

佐野は子ども学について、3つの定義を示している。それらは、以下のものである。

- ①子ども学は、子どもを対象とするさまざまな分野、すなわち子ども関連諸学の総合化をめざしている
- ②子ども学として総合化される子ども関連諸学は、子どもそのものに即して当否を検証されなければならない
- ③体験主義としての子どもに対する知識は子どもに対する決めつけに同化しやすく、子ども学の方角とは相容れない

これらの定義について、②については子ども観の必要性を、③では子ども像のように像(かたち)で決めつけないこと、と佐野の補足説明がつけられている。佐野はこの3つの定義を、「①子ども関連諸学の総合化のためには、②子ども観をもって、③子ども像を否定していかなければならない」とまとめている<sup>6</sup>。佐野の議論は、子どもはかくあるべき、という旧来

の子ども像を超え、子どもの存在をありのままに受容し、研究するという現在の子ども観に通ずる視点をもっており、80年代のアリエスの『〈子供〉の誕生』<sup>7</sup>に端を発するいわゆる「アリエス・ショック」以降の子ども観の転換をもとらえているという点でも彼の子ども学のあり方は新鮮であったといえる。佐野が子どもを専門化、細分化をまねく児童学ではなく、より学際的、総合的にとらえることを可能にする子ども学を提唱したことは、のちの子ども研究を先取りしたものであり、同時に必然であった。加えて野上暁は、佐野が子どもを「社会的あるいは文化的なことばである」ととらえていることに着目し、教育的あるいは法的・制度的な観点から子どもをとらえる従来の児童学に対して、社会的・文化的に子どもを観ていく子ども学に画期的な新しさがあると述べている<sup>8</sup>。これら佐野の卓見が80年代以降の「子ども学」の基礎を形成したといえるだろう。

80年代半ば、その後の子ども学のゆくえを決定づける動きが起こった。それは85年から86年にかけて刊行された『新しい子ども学』シリーズの発刊である。『新しい子ども学』は3巻が出版され、それぞれに「育つ」「育てる」「子どもとは」のサブタイトルが付けられた。このシリーズは先に佐野が提唱した学際的な側面をもち、また野上の指摘にもあったように、これまでの教育的な側面や、法的・制度的なアプローチを超えて、さまざまな学問領域の専門家によって書かれた初めての文献となった<sup>9</sup>。「都市化・情報化の進むこの社会で子どもの世界も大きく変貌し、その基盤となる家庭それ自体が揺らいでいる中で、次代を担う子どもの問題を根底からとらえなおす時点にきている」という80年代当時の問題意識をふまえ、第1巻「育つ」においてこのシリーズの編集部による狙いが示されている。それぞれの学問領域で蓄積された子ども研究を「統合した、子どもをとらえる新しい視点を提供」することがこのシリーズ作成の前提とし、「生命が芽ばえ、誕生し、育くまれ、一人ひとりが違う人格をもつ一個の人間となる過程を、個体の問題として、個体を巡る環境の問題として、さらには一定の文化の中で社会化していく際の問題として複眼的にとらえていくこと」が狙いであるとしている。それぞれのシリーズを簡単に紹介する。第1巻「育つ」では、誕生から乳幼児期までの形成における基本的な関係性＝心の絆の形成を医学、心理学の視点で解明し、第2巻「育てる」では、子どもを取り巻く世界が大きく変貌した現代の子どものケアの問題を心理学、教育学、保育学などの視点から追究し、そして第3巻「子どもとは」では、子どもの存在を歴史学などによる時間軸と、人類学・民俗学などによる空間軸の双方の視点からのとらえかえしにより、これまでの子ども像の洗いなおしと、新しい子ども観の構築をめざしている<sup>10</sup>。

ところで、このシリーズの編者の一人で、後の子ども学のあり方を方向づけることとなったのが小児科医の小林登である。小林は本書での他の編者との対談の中で、「小児科医として子どもの心と体の健康を相手にする立場、それは生物学の立場ですが、それと同時に、ど

んなものでもその裏には必ず社会的な、文化的な何かがあるはずで。その背景を取り込まなければならないと昔から思っていた<sup>11</sup>」と述べているように、かねてから子ども学的な視点での子ども理解の必要性を痛感していた。その後、小林は子どもをめぐる問題はもはや、小児科医だけでも、教育・心理の専門家でも不十分であるとし、子どもを対象とする学問の専門家がパラダイム転換をし、学際的な研究の場を形成する必要であるとし、その場を形成する理念的な支柱として提唱したのが「子ども学」であった。小林はこの研究の理念体系の確立の必要性を訴え、その理念体系の中心を「子どもは生物学的存在として生まれ、社会的存在として育つ」という子ども観にすえた。小林の「子ども学」とは、「生物学的存在としての子どもが生まれながらにもっている育つ力」と、家庭や社会のもつ「社会的存在としての子どもを育てる力」を新しい立場からとらえるものとなる。さらに子ども学とは、「子どもの発育にかかわる生物学的な現象ばかりでなく、育児、保育、教育など＜子どもを育てる力＞をも対象として総合的に、学際的（interdisciplinary）なアプローチで＜子どもとその生活の場＞」も研究目的となると述べている。小林は「子ども学」とは生物学を中心とする科学的体系が基盤であると考えているのだが、それは子どもについて考察する際、子どもの医学・生物学的側面と社会文化的側面とを踏まえる必要があり、さらにこの2側面のうち、社会文化的側面も生物学的にとらえる必要があると考えているからである。その基盤の上で医学、保健学の分野、そして小児医学、心理学、教育学、育児学、保育学などを大きく取り込む必要があるが、それらを超えて、子どもに関連する社会学、行動学、行動科学、文化人類学などを有機的に包括、統合する必要があると述べている。小林の「子ども学」にとって柱となる立場が人間科学（human science）、小児生態学（child ecology）、システム・情報論の3つである。その中でも、子どもを包括的にとらえるという点で、人間生物学（human biology）と「人間のすべてを科学という基盤からとらえる」人間科学が「子ども学」の科学的な基礎理論であると述べている。ちなみにその基盤とは、自然科学の立場からは分子生物学、細胞生物学、機能形態学、発達科学、小児保健学、発達心理学そして行動科学、人文科学の立場では、社会学、文化人類学そして社会人類学などである<sup>12</sup>。

小林の「子ども学」は、学際的、総合的に、また社会・文化的に子どもを考察する佐野の「子ども学」を超え、より科学的なアプローチで子どもをとらえる学問を志向している。かつての情動的、主観的になりがちな子ども研究を、科学的な研究へと昇華させたという点では大きな前進をもたらしたといえよう。

小林は国立小児病院長を退官後、1997年にインターネット上に開設された研究所であるChild Research Netの所長に、さらに98年には甲南女子大学国際子ども学研究センター所長に就任する。そして、2003年に設立した日本子ども学会の準備委員会の代表として、さらに発足後は同学会の代表として、学会の立ち上げ、運営においても中心的な役割を果たす



ことになる。この節の最後に、この日本子ども学会についてふれてみたい。2003年の学会設立の際に掲げられた学会の設立趣意では、現代の子どもの諸問題の多くは人工的な成育環境のもとで起こっており、従来の子育てや教育の考え方による対応だけでは、子どもたちの体の成長や心の発達を支えていくのは困難だとしたうえで、「既存の学問領域にとらわれず学際的な交流をはかりながら、新たな智慧を創出していきたい」と述べている<sup>13</sup>。そして子ども学（チャイルド・サイエンス）の確立をめざし、「学会の成果をふまえて、育児・保育・教育分野の諸問題に提言や情報提供を行い、子どもたちの健やかな成育環境づくりを支援する」ことが日本子ども学会の使命であるとしている<sup>14</sup>。日本子ども学会は2004年より学術集会（子ども学会議）を開催しているが、これまでのテーマや参加者、内容を見ると学際的、総合的なものとなっている。昨年までの集会テーマをあげてみると、以下のようになる。

第1回（2004） メディア社会と子どもたち

第2回（2005） 多文化社会と子どもたち—未来をつくる共生と支援—

第3回（2006） 「子ども学」の未来を考えよう

第4回（2007） 子ども・進化・脳科学～生命の科学と「子ども学」～

第5回（2008） 問題としての子ども から 存在としての子どもへ いじめ理解を深めるために

筆者は第4回集会に参加したが、その時の講演者、シンポジストなどの専門を列举すると、生物学、小科医学、遺伝学、進化生物学、霊長類生態学、環境地理情報学、教育思想史、教育哲学、脳科学、神経生理学、認知神経科学、臨床心理学、考古学などであった。上述の通り、自然科学、人文科学の多様な分野の専門家が「子ども学」と接点をもっていることが分かる。今後、子ども学がどのような発展、進展を遂げるかは予期できないが、総合的、学際的なアプローチで、より科学的な見地からの子ども研究が進展していくであろうと思われる。

### 3. 「子ども学」の現状—大学・短大の設置学部・学科からの検討

前節では、子どもを新しい視点、アプローチからとらえる「子ども学」の系譜を概観してきた。徐々にではあるが、広範な学問領域からの関心が子どもに寄せられ、研究が深化し、蓄積しつつある。だが、先にも触れたようにこうした子ども学のゆるやかな進展とは対照的に、ここ数年急速な広がりをみせている現象がある。それが、大学や短期大学による学部・学科の名称に「子ども学」あるいは「子ども（こども）」を冠する動きである。前節で述べたように、1980年代まではそれらの言葉を学部や学科の名称はおろか、講義名にすら使用することが認められなかった。だが、2004年以降大学設置基準、設置認可の弾力化・簡素

化をはかった文部科学省が、名称の変更に際しても「大学が個性豊かに発展していくためには、社会の変化に対応して大学の新設や学部・学科等の組織づくりが柔軟に行えるようにすることが大切」であるとの認識を示した。そして、「大学は社会や学生のニーズに合わせて柔軟に組織を改編」し、「新しい分野や名称の学部など」の設置を認めたことで、各大学、短期大学において「子ども（こども）」の名称を冠することが容易になり、急速に使用が広まった<sup>15</sup>。この節では、こうした動きを踏まえ全国の大学や短期大学における現状を数字で示し、その広がりを確認していきたい。

検討に先立って、この節で紹介するデータについて述べておきたい。以下のデータは「日本子ども学会」のホームページに掲載されているデータを参考に、文部科学省の大学等の設置認可申請・届出に関するデータを使用した。また、2004年度より学部・学科等の設置に関して、学問分野を大きく変更しないものについては認可ではなく、文部科学大臣への事前の届出制となったため、各大学・短期大学の中には設置認可を出さずに名称変更したケースがある。それらの大学・短期大学についてはホームページにて変更を確認した<sup>16</sup>。大学や短期大学によっては、名称変更後、さらなる変更、あるいは改組を行ったところもあるが、本稿では、はじめに設置・変更した時点のものを使用している。また、2009年度に関しては、現時点（08年12月）で文部科学省による認可が出ていないものもあるが、データに含んでいる。

表1 学部・学科に「子ども学」、「子ども（こども）」を冠した大学・短期大学の数

	大学	短大	合計
2002年	3	0	3
2003年	1	1	2
2004年	5	4	9
2005年	5	7	12
2006年	12	9	21
2007年	16	3	19
2008年	10	3	13
2009年(予定)	8	1	9
総 数	60	28	88

※数字は大学数

まず、学部・学科に「子ども学」、「子ども（こども）」を冠した大学・短期大学の数であるが、2002年に3大学が学科の名称として初めて使用し、2006年に21大学・短期大学をピークに来年度の認可申請分も入れ88大学・短大が使用している<sup>17</sup>。そのうち、大学が60、短期大学が28となっている。（表1参照）上でみたように、大学設置基準が緩和された2004年以降の増加が顕著であることがわか

る。これらの大学・短期大学が全大学・短期大学に占める割合であるが、今年度の文部科学統計一覧によると、全国の大学数が756、短期大学が434であるので、大学では全体の8.1%、短期大学では6.5%となる。また、国立、公立と私立の別であるが、国立はなく、公立についてもわずか1大学だけで、しかも今年度認可申請が出された。申請が認められれば、来年度初めて登場することになる。ちなみに「こども」を学校名に冠した大学・短期大学がそれぞれ各1大学（申請中も含む）あった。

次に学部・学科の名称についてみていきたい。まず大学の学部だが、学部の名称自体に「子

表2-1 学部の名称自体に「子ども(こども)」が使用されているもの(複数のみ)

子ども学部	7
こども学部	2

表2-2 学部の学科に「子ども(こども)」が使用されているもの(複数のみ)

社会福祉学部	5
人間科学部	4
人間関係学部	2
教育学部	3
現代文化学部	2
人間学部	2
人間生活学部	2
人間発達学部	2
人間福祉学部	2
人文学部	2

ども(こども)」が使用されているものと、その学部の学科に「子ども(こども)」が使用されているものとに分けられる。「子ども(こども)」を冠した名称の学部は60学中15大学で、最も多いのが子ども学部で7大学、ついでこども学部で2大学である。(表2-1参照)一方、それ以外で最も多いのが社会福祉学部の5大学である。(表2-2参照)だが、学部で使用されている言葉によって分類すると「人間」を冠した学部が多いことがわかる。表3をみてわかるように、「子ども(こども)」を冠した学部が16大学であるのに対して、「人間」は14大学にのぼる。このことは、前節でみたように「子ども学」において「人間科学が<子ども学>の科学的な基礎理論」と小林が主張していることと符合しているようにも思われる。安易な結論は避けたいが、子ども研究が自ずとより包括的な人間そのものの研究を前提とすることを暗示しているようにも思える。ただし、「人間」を名称に使用する理由は各大学によって大きく異なる可能性があることを考えると、より詳細な検討が必要であろう。

次に学科についてであるが、大学に関しては「子ども(こども)」学科が17大学にのぼる。(表4-1参照)さら

表3 学部に使用されている言葉による分類

学部に冠した言葉	組み合わせて使用している言葉	大学数
人間	科学・学・関係・生活・発達・福祉	14
子ども	育成・科学・学・教育・発達	11
現代	コミュニケーション・社会・生活・文化	5
社会福祉		5
こども	学・教育・心理	4
教育		3
健康	プロデュース・科学・生活	3
人文	学・科学	3
国際	人間・文化	2
ヒューマンケア		1
医療保健		1
学芸		1
教育福祉		1
芸術		1
児童		1
体育		1
発達科学		1
福祉健康		1
文学		1
合計		60

表4-1 子ども(こども)の名称が付いた学科(複数のみ)

子ども学科	10
子ども発達学科	8
こども学科	7
子ども教育学科	6
子ども福祉学科	3
こども文化学科	2
こども家庭福祉学科	2



表4-2 子ども(子ども)との組み合わせの学科(複数のみ)

子ども+こども	17
子ども(こども)+発達	10
子ども(こども)+教育	6
子ども(こども)+福祉	5
子ども(こども)+心理	4
子ども(こども)+現代	2
子ども(こども)+健康	2
子ども(こども)+文化	2

表5 子ども(こども)を冠した短期大学の学科

こども学科	13
子ども学科	8
こども教育学科	2
子ども教育学科	2
こども保育科学	1
コミュニティ子ども科学	1
子ども福祉科学	1

に子ども(こども)との組み合わせで多い学科をみていくと、もっとも多いのが「発達」との組み合わせで10大学、次に教育、保育、心理と続く。(表4-2参照)特に、「発達」の多さは、予断を恐れずにいえば「発達する存在としての子ども」というとらえ方を反映していると思われる。

一方、短期大学であるが「子ども(こども)」学科が28大学中、21大学にのぼり、子ども(こども)と教育とを組み合わせた4大学を加えると圧倒的な数となる。(表5参照)これらの学科の多くが幼児教育・保育者の養成を行っていると思われるが、短期大学では、かつての「児童」「幼児教育」よりもソフトで、子どもを対象とした学科であることをより明確に打ち出したほうが得策であるとの判断が働いているのではと思われる。

以上、大学・短期大学の学部・科目の名称から、「子ども学」の広がり的一端についてみてきた。今回は「子ども(こども)」を冠した大学・短期大学の学部・学科の数、それらに使用された言葉の分類によって大まかな傾向を提示してみた。本稿では具体的な教育内容には踏み込まなかったため、名称に「子ども(こども)」を冠した背景や理由の分析、子ども学との関連についての検証は行わなかった。この点については、のちの機会に詳細に検討していきたい。2006年以降減少しているものの、依然として子ども(こども)を名称とする大学・短期大学は登場している。子ども学の進展とあわせ、今後の動きについては注目していきたい。

なお、巻末に子ども(こども)を冠する大学・短期大学一覧を掲載したので、ご覧頂きたい。

#### 4. むすびに一本学と「子ども学」の今後

前節では、学部・学科に「子ども(こども)」を冠した大学・短期大学がここ数年で増加している状況とこうした動きから推察される背景について検討してきた。一方で、こうした動きと「子ども学」との関連については十分な検討はできなかった。しかし、大学・短期大学のなかには「子ども学」のあり方を見据えて学部・学科を設置、改組、名称変更したものもあろう。本学においても、ここ数年「総合子ども学」の学びを標榜しており、また今後

「子ども学」を冠した研究所の設立に向けて準備をすすめている。本学では、「＜子どもの発達と学びの連続性＞及び＜教育と保育の一体性＞の十分な理解のもとに“トータルな子ども観”をもって、子どもを丸ごと受け入れることのできる教育者・保育者となれるよう」な「総合子ども学」の学びを学生に提供することが重要性であると認識し、主唱してきている。その上で「現代の子どもを総合的にとらえ、地域と連携を図りながら地域の教育・保育に貢献できる初等教育者及び保育者の人材育成を目指し、それを実現化していくために、社会の要請に応じて＜総合子ども学＞の理念を確立し、その理念に立脚した教育の活動と内容を構想し具現化していくこと」が喫緊の課題であると認識している<sup>18</sup>。

そのため、本学において「子ども学」をめぐる動きについての把握、分析、研究は必要不可欠である。しかし、現時点での本学の教育体制、教育内容、教育活動などを概観すると、今後、本学が名実ともに「子ども学」を唱えるにふさわしい教育機関となることは、容易ではない。2節であげたように、佐野や小林による学際的、総合的な、また科学的な見地に立った子ども学のあり方を実現することは一短期大学の範疇を大きく超えたものといえよう。子ども学がめざす、子どもの側からの視点で、子どもをありのままに受容するスタンスを堅持しつつ、可能な限り総合的に子どもを見つめ、より多くの学問領域から子どもを研究すること、さらにそれらの知見を実践につなげていくことが必要であると思われる。独善に陥ることなく、子ども学の研究成果や視点をとりこみつつ、本学における子ども学を確立していくことが必要であろう。今後も引き続き、検討を重ねていきたい。最後に、本稿の執筆の際、本学教員で「総合子ども学研究所」準備委員長である小久保美子先生にさまざまなアイデア、ご助言を頂いた。御礼申し上げたい。

# 一 註 一

- 1 佐野は自らの著書で自身がこの用語の提唱者であると記している。『子ども学』農山漁村文化協会、1980、7頁
- 2 同上、7頁。
- 3 本田和子によれば、お茶の水女子大学において「児童」に代わり「子ども」を名称とした講義の申請をしたが、認可されなかったと述べている。そして、名称に子どもの使用が可能になった契機は1989年に国際連合で採択された「子どもの権利条約」で、それはこの条約によって「子ども」が官製用語となったためだとみている。  
 本田和子 第2回白梅子ども講座「子ども観と子ども研究①ー＜異文化としての子ども＞の視点からー」より（08.12.6）  
 なお、政府はこの条約を「児童の権利に関する条約」としているが、わが国が1994年

に同条約を批准した際に出された文部事務次官通知「＜児童の権利に関する条約＞について」（1994.5.20）のなかで「本条約についての教育指導に当たっては、「児童」のみならず「子ども」という語を適宜使用することも考えられること」と記している。

- 4 『子ども学』, 8頁
- 5 同上, 8－9頁
- 6 同上, 11－12頁
- 7 フィリップ・アリエス著, 杉山光信・杉山恵美子訳『＜子供＞の誕生－アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房, 1980
- 8 野上暁『子ども学 その源流へー日本人の子ども観はどう変わったか』大月書店, 2008, 14頁
- 9 小林登, 小島謙四郎, 原ひろ子, 宮澤康人編『新しい子ども学』海鳴社, 第1巻「育つ」1985, 第2巻「育てる」1986, 第3巻「子どもとは」1986。
- 10 同上第1巻「育つ」, 42頁
- 11 同上, 43頁
- 12 小林登『子ども学』日本評論社, 1999, 22－23頁
- 13 日本子ども学会ホームページ, 設置趣意より。  
(<http://www.crn.or.jp/KODOMOGAKU/about/about.html>)
- 14 同上, 学会会則より。  
(<http://www.crn.or.jp/KODOMOGAKU/about/rule.html>)
- 15 文部科学省「大学の設置認可制度に関するQ & A－質の高い大学づくりのしくみ」8頁参照。
- 16 2004年度からの学部・学科等の設置に関する認可の変更についても, 同上を参照。データについては, 「日本子ども学会」のホームページには「＜子ども学＞を冠する大学・短大」が一覧で掲載されているので, このデータを参考にした。ただし, データは2006年8月11日時点のものであったので, 2007年以降は文部科学省の「大学等の設置認可申請・届出」のうち08年, 09年度分のデータで補足した。さらに事前の届出によって変更された学部・学科については, 旺文社による「大学受験パスナビ」のホームページのデータを補助に使用し, 該当する大学・短期大学のホームページにて変更の年度, 学部・学科の変更された名称をすべて確認した。それぞれのURLは以下である。

日本子ども学会「＜子ども学＞を冠する大学・短大」

<http://www.crn.or.jp/KODOMOGAKU/library/univer.html#2007t>

文部科学省「大学等の設置認可申請・届出」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ninka/jyoukyou.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ninka/jyoukyou.htm)

旺文社「大学受験パスナビ」 <http://passnavi.evidus.com/>

- 17 大学・短期大学の学部・学科の中には、専攻名に「子ども（こども）」を冠しているものもあり、註16にある日本子ども学会のデータにもいくつかの大学・短大の専攻が掲載されている。だが、全てが網羅されておらず、把握することも困難なため、今回は全体のデータには入れなかった。ただし、承知しているものについては巻末に掲載した。
- 18 本学「総合子ども学研究所」準備委員会「千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所」（仮称）の「設置趣意」より。なお、「設置趣意」については、今後研究所の設置の際に、さらに検討・研究を行い、後日改めて示す予定である。

### <「子ども」「こども」を冠した大学・短期大学・学部・学科一覧>

※年は新設・開設・変更した時のもの。名称変更、改組したものについては開設、変更があった年に掲載

#### 〔大学〕

##### 【2002年】

鎌倉女子大学児童学部子ども心理学科・神奈川県鎌倉市  
金城学院大学人間科学部現代子ども学科・愛知県名古屋市  
鹿児島純心女子大学国際人間学部こども学科・鹿児島県薩摩川内市

##### 【2003年】

東大阪大学こども学部こども学科・大阪府東大阪市

##### 【2004年】

東京成徳大学子ども学部子ども学科・東京都北区  
東京純心女子大学現代文化学部こども文化学科・東京都八王子市  
同志社女子大学現代社会学部現代こども学科・京都府京田辺市  
神戸海星女子学院大学文学部心理こども学科・兵庫県神戸市  
活水女子大学健康生活学部子ども学科・長崎県長崎市

##### 【2005年】

白梅学園大学子ども学部子ども学科・東京都小平市  
浜松大学健康プロデュース学部こども健康学科・静岡県浜松市  
名古屋学芸大学ヒューマンケア学部子どもケア学科子どもケア専攻・愛知県日進市  
四国学院大学社会福祉学部子ども福祉学科・香川県善通寺市  
梅光学院大学子ども学部子ども未来学科・山口県下関市

【2006年】

札幌学院大学人文学部こども発達学科・北海道札幌市  
東北福祉大学子ども科学部子ども教育学科・宮城県仙台市  
田園調布学園大学人間福祉学部子ども家庭福祉学科・神奈川県川崎市  
中部学院大学人間福祉学部子ども福祉学科・岐阜県各務原市  
東海女子大学人間関係学部子ども学科・岐阜県各務原市

＊2007年度より東海学院大学に名称変更

相愛大学人間発達学部子ども発達学科・大阪府大阪市  
甲南女子大学人間科学部総合子ども学科・兵庫県神戸市  
姫路獨協大学医療保健学部こども保健学科・兵庫県姫路市  
中国学園大学子ども学部子ども学科・岡山県岡山市  
吉備国際大学社会福祉学部子ども福祉学科・岡山県高梁市  
高松大学発達科学部子ども発達学科・香川県高松市  
熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科・熊本県熊本市

【2007年】

浦和大学子ども学部子ども学科・埼玉県さいたま市  
東京未来大学こども心理学部こども心理学科・東京都足立区  
目白大学人間学部子ども学科・東京都新宿区  
金沢星稜大学人間科学部こども学科・石川県金沢市  
浜松学院大学現代コミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科・静岡県浜松市  
中部学院大学子ども学部子ども学科・岐阜県各務原市  
名古屋芸術大学人間発達学部子ども発達学科・愛知県北名古屋市  
愛知東邦大学人間学部子ども発達学科・愛知県北名古屋市  
相山女学園大学教育学部子ども発達学科・愛知県名古屋市  
京都造形芸術大学芸術学部こども芸術学科・京都府京都市  
プール学院大学国際文化学部子ども教育学科・大阪府堺市  
松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科・愛媛県松山市  
山口学芸大学教育学部子ども教育学科・山口県山口市  
福岡女学院大学人間関係学部子ども発達学科・福岡県福岡市  
九州保健福祉大学社会福祉学部子ども保育福祉学科・宮崎県延岡市  
沖縄大学人文学部こども文化学科・沖縄県那覇市

【2008年】

国士舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科・東京都町田市



相模女子大学学芸学部子ども教育学科・神奈川県相模原市  
帝京科学大学こども学部こども学科・山梨県上野原市  
聖隷クリストファー大学社会福祉学部こども教育福祉学科・静岡県浜松市  
日本福祉大学子ども発達学部子ども発達学科・愛知県知多郡美浜町  
大阪青山大学健康科学部健康こども学科・大阪府箕面市  
神戸松蔭女子学院大学人間科学学部子ども発達学科・兵庫県神戸市  
近大姫路大学教育学部こども未来学科・兵庫県姫路市  
くらしき作陽大学子ども教育学部子ども教育学科・岡山県倉敷市  
福山平成大学福祉健康学部こども学科・広島県福山市

【2009年予定】

こども教育宝仙大学こども教育学部・東京都中野区  
新潟県立大学人間生活学部子ども学科・新潟県新潟市  
富山国際大学子ども育成学部・富山県富山市  
仁愛大学人間生活学部子ども教育学科・福井県越前市  
東海学院大学人間関係学部子ども発達学科（仮称）・岐阜県各務原市

＊子ども学科からの名称変更

びわこ学院大学教育福祉学部子ども教育学科・滋賀県東近江市  
帝塚山大学現代生活学部こども学科（仮称）・奈良県奈良市  
平安女学院大学子ども学部子ども学科・大阪府高槻市  
比治山大学現代文化学部子ども発達教育学科・広島県広島市

〔短期大学〕

【2003年】

目白大学短期大学部子ども学科・東京都新宿区

＊2007年度より目白大学人間学部子ども学科に改編

【2004年】

関東短期大学こども学科・群馬県館林市  
千葉経済大学短期大学部こども学科・千葉県千葉市  
東京田中短期大学こども学科・東京都町田市  
佐賀女子短期大学こども学科こども学専攻・佐賀県佐賀市

【2005年】

浅井学園大学短期大学部こども学科・北海道江別市

「子ども学」の変遷と課題

山形短期大学子ども学科・山形県山形市  
東北生活文化大学短期大学部こども学科・宮城県仙台市  
東京福祉大学短期大学部子ども学科・群馬県伊勢崎市  
埼玉純真女子短期大学こども学科こども学コース・埼玉県羽生市  
三重中京大学短期大学部こども学科・三重県松阪市  
近畿大学豊岡短期大学こども学科・兵庫県豊岡市

【2006年】

函館大谷短期大学こども学科・北海道函館市  
新島学園短期大学コミュニティ子ども学科・群馬県高崎市  
淑徳短期大学こども学科・東京都板橋区  
青山学院女子短期大学子ども学科・東京都渋谷区  
昭和女子大学短期大学部子ども教育学科・東京都世田谷区  
高田短期大学子ども学科・三重県津市  
京都光華女子大学短期大学部こども保育学科・京都府京都市  
大阪健康福祉短期大学子ども福祉学科・大阪府堺市  
純真女子短期大学こども学科・福岡県福岡市

【2007年】

青森明の星短期大学子ども学科・青森県青森市  
帝京短期大学こども教育学科・東京都渋谷区  
名古屋経営短期大学子ども学科・愛知県尾張旭市

【2008年】

川口短期大学こども学科・埼玉県川口市  
香川短期大学子ども学科・香川県綾歌郡宇多津町  
福岡こども短期大学こども教育学科・福岡県太宰府市

【2009年予定】

有明教育芸術短期大学子ども教育学科・東京都江東区

<「子ども」「こども」を冠した大学・短期大学の専攻>

※承知しているもののみ掲載

〔大学〕

【2006年】

関西国際大学人間学部教育福祉学科子ども学専攻・兵庫県三木市

＊ 2007年度より教育学部教育福祉学科子ども学専攻に変更

【2007年】

敬愛大学国際学部地域こども教育専攻・千葉県佐倉市

九州ルーテル学院大学人文学部人文学科こども専攻・熊本県熊本市

〔短期大学〕

【2002年】

鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻・鹿児島県鹿児島市

【2005年】

桜の聖母短期大学生活科学科福祉こども専攻こども保育コース・福島県福島市

鈴鹿短期大学こども学専攻・三重県鈴鹿市

【2006年】

青森短期大学地域創造学科子ども専攻・青森県青森市

【2007年】

明和学園短期大学生活学科こども学専攻・群馬県前橋市